

## 〈被枕詞〉考

工藤力男

学問の進歩と歴史は、ある意味では、  
術語の進歩と歴史である。

—— 亀井 孝 (1948)

はじめに

古代和歌の修辭をめぐる議論において、枕詞はつねに人々の関心呼びつづけてきた。その起源・意味の論が中心であることはもちろんだが、時代を追って変容をあとづけ、あるいは個人による用法の差異を論ずるなど、研究は多彩である。そのさい、枕詞を受ける語はあくまでも脇役であつて、さほどの関心が払われなかつたが、

今、その脇役にも光の当てられる時が来ている。文学研究の進展に伴って、従来、枕詞側すなわち上ないし表から見ていたものを、その反対側すなわち下ないし裏から見ようとするのである。これは当然の要求というべきだろう。

その裏側にあつて枕詞を受ける語が、「被枕詞／被枕」の名で、文学研究なかんづく萬葉集研究の術語として登場してから、いかほどの年数がたつだろうか。それが辞典類に用いられると、たちまち權威を帯びて流通するようになるが、これについて特に議論がなされたという記憶がない。枕詞によつて飾られることばだから、「被枕詞／被枕」だというのだろう。人々はそれを当然のこととして受け入れ、あるいは自らの論に用いているのだと思う。しかし、これが学界に広がり始めたとき、わたしは強い違和感を覚え、自分では用いないように努めてきた。そして一度だけ私見をさりげなく表明したことがある。『国民百科事典』(1978)の第十三巻、「まくらことば」の項の末尾に次のように書いたのである(「被枕詞／被枕」などの斜線は「あるいは」の意味で用いる)。

枕詞は、古くは〈諷詞よそえことば〉〈発語〉、近世には〈冠辞〉〈頭辞〉などと称され、明治以降は〈枕詞〉に定着した。それを受ける語句を、近年〈被枕詞ひまくらことば〉<sup>ひまくら</sup>というのは稚拙な呼称で、〈本辞〉あるいは〈受詞〉が適切である。

右の〈被枕詞〉に添えた割りルビ「ひまくらことば」には自信がない。多分そう読むのだろうという推測の域を出ていないのである。

わたしの違和感はその後も弱まることなく、近年その「被枕詞／被枕」の用いられることが繁くなるにつれて、むしろ強くなっている。七年前、「万葉集事典」と銘打たれた『別冊国文学』46(1993)には、三十七ページに

及ぶ「枕詞・被枕詞事典」(白井伊津子編)が掲載された。このように標題に立てられたことよって、これは術語としていよいよ学界に浸透するに違いない。すでに手遅れの感がなきにしもあらずだが、本稿は、「被枕詞」という呼称に疑義を呈し、ついでに「枕詞」への異見を述べて、学界にささやかな問題を提起しようとするものである。以下の論述において、文献はおおむね著者名で示し、その公表年次をキリスト紀元による算用数字で括弧書きする。

一

「被枕詞／被枕」と呼ばれるものを、先人たちはなんと呼んでいたのだろうか。日本歌学大系を卒読したころ、特定の呼称には巡りあわなかった。

次に福井久蔵(1922)について見たが、かつて人々が枕詞を受ける語に特別な名称を与えたという記述は見えない。福井自身にも特にそれを志向したふしは見えないが、該書の巻末に「連接語索引」として、枕詞によって修飾される語の一覧を掲げている。しかし、特に定義してはいないところを見ると、これを術語として押し出す意図が著者にあったとは思えない。考察の視点はあくまでも枕詞の側にあつて、「連接語」は、索引の標題のために臨時に作られた語だつたとおぼしい。

この「連接語」は人々に受けつがれなかった。そもそも、これは実態に合わないものである。例えば「たらちねの母」において、「母」は「たらちね」によって喚起される語であつて、何かを連接するものではない。そし

てこの二つを連接する語は「の」であるのに、福井の言う連接語は「母」を指す。だが「連接語」は、文法用語の「接続語／接続詞」を連想させる。ここでは、「たらちね」と「母」とを結ぶ「の」が連接語だという印象を与える。このような「Aの」形式の枕詞、「あしひきの」「たまづさの」「ぬばたまの」などにおいて、語としての実質は「の」を除いた部分にあるので、連接語とのずれは常に感得されることになる。これは、「玉藻なす」のような「Aなす」形式の枕詞においても同じである。連接の機能をになう「なす」が枕詞の一部であることは言うまでもない。

「被枕詞」の初出を極めることは至難であるが、いま知ることのできる範囲では、福井の著書が刊行された三年後の市村平(1936)に見え、「枕詞と被枕詞との間に一種の聯想的情調を起させるもの、いはゞ氣分的修飾とでもいふべきものまでを包括させ」などと用いられている。特別な説明が施されていないのは、研究者のあいだで了解されていたからだろうか。だが、その十年後の高志覚成(1946)では、まだ平凡な「後続語」「被修飾語」が用いられている。

この領域で多くの論文を書いた土橋寛氏の論文の一つ(1955)では、

このように歌全体を意味と無関係に、ただ被枕との関係だけで用いられているところに、枕詞の「意味の非実質性」は明らかに捉えられるであろう。

として、一段と省略の進んだ「被枕」の語が、定義もなく登場する。稿末に添えた三つの別表においても、見出し語として自明のように掲げられている。

武田祐吉(1957)には、「特殊の修辭」として、枕詞・序詞にかなりの紙数を割いている。しかし、枕詞を受

ける語は「後続の詞句」「後続の句」「修飾される語」、序詞を受ける語は「後続の詞句」とするだけである。山口正（1964）に至って、第四章に添えた枕詞一覽表に「被枕句」の文字が見える。しかし、これは索引にも出しておらず、福井の「連接語」と同じような、便宜的・臨時的な使用であつたかと思われる。これらと時期が交错する辞典類、『日本文学大辞典』（1951）の「枕詞」の項（久松潜一執筆）では、枕詞を受ける詞に特別な名称は用いていない。大塚龍夫『枕詞辞典』（1961）の凡例には、「一つの枕詞が修飾する語」「その枕詞によつて修飾せられる語」とあつて、やはり特別な名称を与えてはいない。

その翌年に刊行された『和歌文学大辞典』（1962）が期を画することになるようだ。高崎正秀執筆の「枕詞」の項には、「枕詞は被枕詞との関係において成立するものである」「被枕詞の性格」など、「被枕詞」を五回にわたつて用いており、明らかに術語たることを自覚した使用が見える。この辞典に掲載されたことが契機となつて、これが学界に流通しはじめたのでないか、とわたしは見ている。金子武雄（1972）には、別の視点からではあるが、「被枕」と呼ぶことには従えないとし、むしろ「被主/被主詞」とでも呼ぶべきだとの発言がある。増井元（1973）には、「枕詞によつて『修飾』される語句（いわゆる被枕）」とあるなど、一貫して「いわゆる」という冠辞を付けている。「被枕」をいちおうは認めながらも、その使用をためらつたのだろうか。

右のような状況下、序の節に引いた『国民百科事典』の出たところから、「被枕詞」を標題に掲げる論文も見え、確実に学界に浸透していくさまがうかがわれる。一方、早い時期に「被枕詞」の省略形「被枕」を用いた土橋寛氏だが、『日本古典文学大辞典』（1985）の「枕詞」の項では、七回の機会をすべて「後続詞」で通している。三十年を経ての術語の変更である。土橋氏のいかなる思索の結果か、わたしは知ることができないが、望ましい変

節であつたと思う。だが、『和歌大辞典』(1986)の「枕詞」の項(滝沢貞夫執筆)には「被枕詞」が用いられている。そのような経過ののちに、「上代の文献に見える被枕詞(枕詞のかかる語句)を見出し語として」(凡例)とある白井伊津子(1989)が書かれ、やがて、序の節に示した雑誌の「枕詞・被枕詞事典」に発展する。その雑誌には他の執筆者によるゴチック体の「被枕詞」も見える。

この雑誌よりわずかに先んじて刊行された、枕詞研究の専書、近藤信義(1988)では次のごとくである。初めの「枕詞の史」の章では、「受け言葉との関係性」、西郷信綱『万葉私記』を紹介するくだりに「枕詞と被枕詞とに介在する空間」、吉本隆明『古代歌謡論』を紹介するくだりに「枕詞と受けのことばとの関係」「枕詞と受けの言葉とのあいだ」、第一章に「枕詞、被枕詞の二句をセットとして」、第三章に「ぬばたまのによつて導かれた語」「枕詞と受けの詞との双方」などとある。一定した術語らしきものが見えず、これらについての明確な記述も見えない。近藤氏は態度を決めかねていたのでないだろうか。これは無理もないことであつたとわたしは思う。

## 二

枕詞に似た古代和歌の修辞法のひとつ「序詞」。これによつて導かれる語句についても同様の問題があるはずである。しかし、学界では序詞と枕詞との性質の差異が主たる議論の対象であつて、序詞に導かれる語句の呼称は、ほとんど注意されることがなかつた。そうした状況で、上田説夫氏は最も明確な自覚のもとに術語を用いた

一人である。上田（1983）には「連結語」なる語があつて、次のように説かれている。

従来の注釈書などの用法でいうなら、「かかる語」、つまり序詞の被修飾語に相当する語であるが、ここではこの語を「かかる語」とみなさないのである。本論ではこの語をまったく別種の機能を有する語と考え、一首の序詞のなかでの序詞と心情部を連結する役割をはたす語とみるのである。

「かかる語」という表現は解せないが、序詞を含む歌を、「序詞—心情部」構造ととらえ、序詞は心情部の中の語を修飾するだけではない。序詞に導かれた被修飾語は心情部に入りこんで、両者を連結する機能を果たしているというのである。

一見これに似た見解は、伊藤博（1976）に見える。従来の研究が、序詞の分類に関心を注いだゆえに、序詞を心情表出部への「かかり」と見ることへの抵抗に発している。少し長いが、次の萬葉集歌をめぐる記述で示そう。

「をとめらが放りの髪を」木綿の山雲なたなびき家のあたり見む（二二七四）

（中略）右の上二句は、「木綿」にかかる掛詞的用法と説かれているものである。（中略。萬葉集私注・萬葉集注釈の説を引いて）いずれも心象部の一部「木綿」との関連でしか一首の序を考えていない。しかし、この序詞を単に掛詞的用法として扱ひ、機智を漂わせただけのものと見るのは、おそらく失考であろう。おとめが放りの髪を結ぶという序の内容は、「家のあたり見む」という心情表現とも浅からずかわつて旅情を深め、一首全体の雰囲気を高めることに参与していると読みとらなければなるまい。（中略）当面の序詞は、「木綿」における二重表現を媒介としつつ、下句における心情の表象（譬喩）ともなっているのである。「木綿」は序詞（上）と本文（下）との「つなぎ」のことばなのであつて、（以下略）

つまり、上田氏が心情部に重きを置き、序詞を受けて心情部につなぐ語句を「連結語」と称するのに対して、伊藤氏は、心情部の譬喩的表現の重みになうがゆえに、序詞と心情部との「つなぎ」役の掛詞を重んずるのである。

この論はさらに広がる。

庭清み沖辺漕ぎ出づる海人舟の梶取る間なき恋もするかも(二七四六)

において、「梶取る」までが「間なし」の序であるとする通説は不自然だと批判する。伊藤氏は、作者の意図に即すると「梶取る間なし」がつなぎことばであるとし、「淡路島門渡る舟の梶間にも我は忘れず家をしぞ思ふ」(三八九四)などの「梶間」の例によっても、この解は動くまいという。「つなぎことば」の語が、このような掛詞式序詞にこそよくふさわしいことは、

秋の野の尾花が末の生ひ靡き心は妹に寄りにけるかも(二二四二)

について、澤瀉久孝『萬葉集注釈』が「生ひ」までを、日本古典文学全集本が「生ひ靡き」までを、それぞれ序詞とするのが妥当性を缺くことを見れば明らかである。

右に見たように、上田氏の「連結語」は、伊藤氏の「つなぎことば」に比べて物足りないことは否定できない。しかも、広義の序歌には次に掲げるように、つなぎことばのないものがある。伊藤氏の挙げる十五首のうちの一つである。

「三輪山の山辺まそ木綿短木綿」かくのみからに長くと思ひき(一五七)

その直下の語を飾ることを生命とする枕詞に比べると、序詞はかくも複雑な内容を含みもつのである。それに



もかわならず、枕詞を受ける語を「被枕詞」と称した市村平（1930）は、序詞を受ける語を「被序詞」としている。単純な類推である。境田四郎（1955）も同様で、「人麿が屢々試みたやうに長い序詞を対句に仕立て、押し進め、愈々被序即ち主想に移る時」のように、「被序」なる語も作っている。境田四郎（1958）には、早く「序と非序との間に或る気分の暗合を企図したもの」もあるので、反対概念に近い同音語を作ったことになる。

近年の辞書、例えば『和歌大辞典』（1986）の「序詞」の項では「後続の詞句」（池田勉執筆）とあり、『日本古典文学大辞典』の「序詞」の項（奥村恒哉執筆）には、序詞を受ける語句には名を与えてはいない。

三

序の節でわたしは、「被枕詞」の読み方が確かにはわからない旨を記したが、「被枕」はなおのこと分らない。まさか「ひちん」ではあるまいと思つたのだが、今回の調査で接した文献の中で読み方を明示したのは、鈴木日出男（1986）に「被枕」とあるだけであつた。

わたしが〈被枕詞<sup>ひまくら</sup>ことば〉を稚拙だと言ひ、これに強い違和感を覚えるのは、これが、音読み「被」と訓読みの「枕詞」の合わさつた語であることによるらしい。これに類する〈認定の漢語―和語〉構造の形に「不X」がある。それには、「不得手」「不屈き」「不心得」など二十語くらいは直ちに挙げる事ができる。だが、これらの「不」は、もはや漢語の語構成法を離れて日本化し、下部成素「X」を装定していると思われるものがある。「被X」とは異なる構造なのである。

さて、その違和感は、もしかしたら己れの無智によるのかも知れない、この構造の語が現代日本語にはいくつもあるのかも知れない。そこで、手元の国語辞書で「被」を上字に持つ「被X」の形の見出し語を通覧してみた。そして次の結果を得た。

Xが名詞で「被」がそれを修飾する〈連体修飾語—名詞〉構造の語には「被膜」がある。「被」が動詞、Xがその補語と解される〈動詞—名詞〉構造の語には「被弾」「被災」などがある。Xが動詞で「被」が受動の認定関係を表わす〈受動の助字—動詞〉構造の語には「被害」「被曝」「被覆」などがある。もちろん、最後の構造のものも最も多い。いずれもXは音読みの語であって、訓読みの語は一つも見いだせなかった。「被まくらことば／被まくら」などという語を、日本人は認めてこなかったようだ。

「被枕詞」に模して作られたらしい「被序」はどうだろうか。「序」は「まくら」と違って音読みではないか、と言う人があるかも知れない。はたしてそうか。漢字「序」は、名詞としては、順序の意か文体の一種に、動詞としては「ついで」の意に解するのが普通だろう。したがって熟語「被序」は、「ついでらる」と解するのが最も自然である。「被序」は漢語とは似て非なるものである。むしろ和語ではない。あえて言えば、片言あるいは隠語だろう。

さて、『国民百科事典』の「まくらことば」の項で、わたしは「被枕詞」に代わる「本辞」を呈示した。これは丸山嘉信(1968)に拠るものである。そこには典拠を示す紙幅がなかったので、ここにそのことを明らかにして感謝の意を表明したい。その原文を引いておこう。

枕詞に関する古来の呼称は、多少ともその本質観を物語っている点が見える。たとえば「発語」(日本紀私

注<sup>(三)</sup>とか、「諷詞」(仙覺抄)とか、「冠辭」(真淵)のような名称は、下にある本辭に対して附着せる裝飾であるか、または本辭を導出するための迎え水みたいなものである、という考えを若干示している。

「本辭」が丸山氏の創作によるのか、あるいは何か先行する発言があるのか、その論文からは読み取ることができない。そして、氏がその考えをさらに積極的に展開することがあったか否かも知らない。かの事典で、「本辭」あるいは「受詞」が適當だ、と並列の形で書いたのは、「冠辭」に対しては漢語めかした「本辭」が、「枕詞」に対しては和語めかした「受詞」が適當だと考えたからである。「本辭」を先立てたのは丸山氏への敬意を示すためであり、「受詞」はわたしの思い付きに過ぎない。

なお、この点を補うものとして、序詞に関する森重敏(1973)を挙げておきたい。「序詞による比喻(能喻)と本詞(所喻)との関係」のように、「本詞」という語を当てている。「冠辭—本辭」の対応に比べると、「序詞—本詞」の対応もきれいである。これを「枕詞—本詞」に転用することも可能だと考えるのである。

被枕詞について結論を言うと、「後統詞」でいいのである。この語が、それだけを対象にして論ぜられることはまずない。必ず枕詞との関係で論ぜられるのだから、その文脈にあるかぎり、「後統詞」で十分に明示することができる。したがって、これに対して「被枕詞／被枕」という片言の命名をする必要はなかったのである。あえてそれに名付けるなら、本節に述べた「本辭」あるいは「本詞」を採るべきである。

## 四

本稿の標題に關する結論は前節に述べたが、これに關わつて「枕詞」への疑問を表明しておきたい。

福井久蔵(1927)は枕詞の名稱について、矢田部公望の「發語」から加藤竹里の「玉かづら」まで、諸説を十二語に整理して掲げ、ほかにも相当数あるとしている。高崎正秀(1962)は、『和歌初学抄』から「次詞」を加えている。さらに文献を捜せばまだ殖える可能性はあるが、ここでその発掘は目的でない。

和歌の修辭の用語として何ゆえに「枕詞」が用いられたのか。文献上の初出とされる今川了俊の「落書露見」を読んでもわからない。その由来に言及することは、いまのところ徒勞である。とまれ、福井久蔵によると、江戸時代にはおおよそ、「枕詞」と荷田春満に始まる「冠辭」が対立していたと見ていいようである。

賀茂真淵が師の荷田春満の「かうむりことば」説についたのは幸いなことであつた。真淵は『冠辭考』序文に次のように書いた。

言ことしたらねば思ふ事を末にいひ、仇あやし語を本もとに冠かむらせついで、彼五つがひのすがたをたらはせるあり、こはいよ、後にいで來たるものながら、心は上つ世の片歌にことならず、ひたぶるに真まこゝろなるを雅言みやごころもて飾ればなり、譬たとへば貴人うごみこのよき冠かむりのうへに、うるはしき花挿はなさらんが如し、

それに対して本居宣長が『玉勝間』八の巻に述べた見解は、「枕はかしらにおく物にはあらず、かしらをさゝゆるものにこそあれ」「すべて物のうきて、間まのあきたる所を、さゝゆる物を、まくらとはいへば」とするあたり

までは、師匠の説の前半を受けていると見える。しかし、「吾師の、冠詞カウリコトバといはれたるぞ、ことわりかなひては有ける、しかはあれども、今はあまねく、枕詞といひならひたれば、ことわりはいかにまれ、さてもありぬべくこそ」としたのは、宣長らしからぬ論理の腰砕け、長い物に巻かれた、とわたしの目には映る。

枕まくらは頭の下にあつてそれを支える道具である。ならば、枕ことばは本体である被修飾語の下にあるべきだろう。だが、現実の枕ことばは、本体たる語の上に位置するために、遙かに目立っており、「枕」の機能に即していないのである。真淵の譬喩に継いで敷衍すると、権威を有するのは王であつても、それを明示するのは王が頭こゝろにいたたく冠であるようなものだ。歌の知的な意味にとつて重要なのは本体の語であるが、音声上の効果や映像の喚起には、飾りの語のはたきが顕著である。本体を莊嚴する語だから、として「冠辞」の称を与えたのは最も適切であつた。しからば、本体の語を「本辞」と称するのは当然の成り行きであろう。これが、「冠辞」に対するに「本辞」を採る理由である。

なお真淵は、『冠辞考』の序文に、「冠かうむり辞じ」「冠かうむりことば」「冠辞」と書き、「今此かうむりことばを冠辞と書」とした。したがつて、本文中では「かうむりことば」と呼んでいたのだろう。宣長は「冠辞」に「カウブリコトバ」の読み仮名を付けている。しかし、書名は「かんじこう」と読みならわしている。彼の『語意考』『歌意考』を初め、この時代、本文中での用法とは別に、書名は音読みすることが一般である。ここに「冠辞」を音読みするのはそれゆえである。よしんばこれを訓で「かんむりことば」と読んだとしても、対応する後続詞の別称「本辞」も「もとことば」と訓読みすればいいので、本稿の論旨に破綻は生じない。

おわりに

以上、和歌研究史という大河を一杓の水で測るに近い営みの経過を記した。これを要約すると次のようになろうか。

一 枕詞を受ける語句を「被枕詞／被枕」と称するのは、語の構造から見て不適切である。  
 二 一般にはそれが単独では用いられないので、「後続詞」あるいは「受ける語」で十分である。それは、序詞を受ける語についても同様に言えることである。

三 あえて命名するならば、「本辞」あるいは「本詞」が適切である。

四 「枕詞」の名称も、できることなら「冠辞」に復したい。

術語はとりわけ「名詮自性」であることが望ましい。言語の学徒の端くれとしてそう考えるわたしは工藤(1969)で、「位相」について、命名者の意図に帰って用いるべきことを述べ、あわせて誤解の一因が命名者の側にもあることを指摘した。次いで工藤(1969)で「語源俗解」の用法の混乱について発言した。そのたちばからなす第三の発言である本稿は、前二稿とは少し意味が違う。すでに数百年の歴史をもつ「枕詞」を改称せよと言ったところでせんないことだからである。しかし、「被枕詞」はその使用の歴史が浅いので、今ならまだ軌道修正ができると考える。かかる片言を学界でこのまま流通させることは、同じ学界に片足を載せる自分として恥ずかしいことである。そもそも、言葉の藝術である和歌の研究が片言を用いてなされるのは、いかにも滑稽なこと

ではなからうか。

以上、まことにささやかな提言である。そんなことに目くじら立てなくても、という非難の声が轟きそうな予感がする。それでも、このつぶやきが、いくたりかの心に何ほどかの揺らぎを与えることができたなら幸いである。かつて、人麻呂歌集の議論において、略体・非略体という呼称が行われた。後者は、標準たるべき書記体にならず、「非」の字をかぶせたもの、本末填倒の名付けであった。近年、それを「常体」などと称するようになったのは、術語の使用におけるこの学界の健康さを証明したものだと思う。ならば、わたしの提案の聞き入れられることは望みなきにもあらずだろうか。

〔文献〕

- 市村 平 (1930) 『短歌に見えた枕詞と序詞との研究』(『國語と國文學』第七卷六・七号)  
伊藤 博 (1976) 『萬葉集の表現と方法 下』(塙書房)  
上田 説夫 (1983) 『万葉序歌の研究』(櫻楓社)  
亀井 孝 (1988) 『日本語の現状と術語』(『思想の科学』第三卷九号)  
金子武雄 (1972) 『称詞・枕詞・序詞の研究』(新塔社)  
工藤力男 (1996) 『語彙論の術語〈位相〉考』(『成城文藝』百五十五号)  
工藤力男 (1997) 『語源俗解考』(『成城國文學論集』第廿五輯)  
高志覚成 (1940) 『萬葉集の枕詞に於ける様式性』(『國語と國文學』第十七卷十号)  
近藤信義 (1990) 『枕詞論 古層と伝承』(櫻楓社)  
境田四郎 (1928) 『萬葉集の序詞について』(『國語國文の研究』廿二号 文獻書院)  
境田四郎 (1955) 『枕詞と序詞』(『萬葉集大成』言語篇)

- 白井伊津子 (1988) 「上代被枕詞索引稿(上)」(『叙説』奈良女子大学文学部国文学研究室)
- 鈴木日出男 (1986) 「万葉的表現と古今的表現」(古橋信孝編『日本文芸史』一 有精堂)
- 高崎正秀 (1962) 「枕詞」(『和歌文学大辞典』明治書院)
- 武田祐吉 (1957) 『増訂萬葉集全註釋』第二卷(角川書店)
- 土橋 寛 (1955) 「枕詞の概念と種類」(『立命館文學』百廿四号)
- 福井久蔵 (1927) 『枕詞の研究と釋義』(不二書房)
- 増井 元 (1973) 「万葉集の枕詞」(『萬葉集講座』第三卷 有精堂)
- 丸山嘉信 (1966) 「和歌の修辭 II」(『和歌文学講座』第一卷 櫻楓社)
- 森重 敏 (1973) 「万葉集の修辭」(『萬葉集講座』第三卷 有精堂)
- 山口 正 (1964) 『萬葉修辭の研究』(武蔵野書院)
- 付記 新日本古典文学大系『萬葉集』で、わたしは「枕詞一覽」を担当している。その凡例では、枕詞に修飾される語句は、  
 無難な「受ける語」としている。その意味で本稿は、「鶴・西宮の法則の剰余——大宮仕へ安礼衝くや考——」(西宮一  
 民編『上代語と表記』2000 おうふう刊)に続く、「新日本古典文学大系『萬葉集』校注拾遺の三」にあたる。なお、  
 右の副題の「仕へ」を言語処理機で「支へ」と誤変換し、そのまま見落してしまった。このばを借りて訂正する。